

今、『熟慮』ということについて —国展第85回記念展によせて—

会員／前国画会事務局長 岡 部 和 彦

国画会が85回展を迎えました。1925年が創立ですから私達にとっては、曾祖父に当たる年齢の人々により組織されたわけです。

1929年（世界恐慌始まる）

1937年（日中戦争始まる・盧溝橋事件）

1941年（太平洋戦争始まる）

1945年（第2次世界大戦終わる・ポツダム宣言受諾）の激動の時代を過ぎ、その後の国情は65年間経済状況にのみ対応して来たと言っていいでしょう。しかし、国画会は創立以来、ほとんど枝分かれ無しに活動して来ました。このことは、他の公募美術団体と一線を画す特徴と考えられます。日々の生活に関係あるや無しやにかかわらず、美術家の野放図な世界に、団体での活動が85年の一貫した継続をなし得たのは、如何なる秘薬があったのかと、最近の低迷する公募展にあって、国展の熱烈たる力を感じる者にとって、知りたいことの一つでありました。

2008年、国展のイベントであるトークインの実施後、このイベントにご参加頂いた皆さんに、一言問いかけさせて頂きました。『今、公募団体の現状をどのように認識していますか』と。比喩的なお話でしたが、最近の各団体の組織運営を分析してみると、例えて表現すれば、トランプのカードで組み立てたブリッジ、のようであり、一枚のカードが倒れると脆くも全体が崩壊するであろうと、……安易な改革を一見正義の仮面をかぶって推し進めた結果が、どのようであったか明白であると、掌握されておられるようでした。

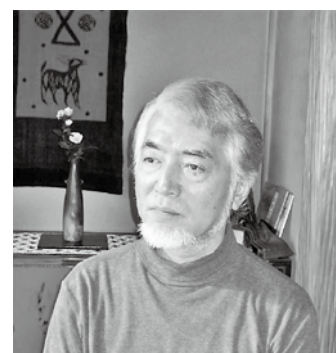
国画会の運営は、会員による選挙によって選ばれた、会務委員による合議制を取っています。この体制を、

一般的な民主主義の数の決着、現今の国会のような党派、派閥のような対立ととらえることは、大変俗物的な妄想です。なぜなら、会員個々が自立した美術家であり、更に、会員であろうとも自分の作品の良し悪しを隠すことが出来ない。こうした会員による合議制に立脚しているのです。更に、国展は5部門（絵画・版画・彫刻・工芸・写真）を擁し、言わば、多くの競合団体が共存するわけで、何をしなくてもコラボレーションなのです。

飛行機設計の第一人者の、ある博士が若手設計者達、30名に観察の重要性を教えるための演習に、石膏デッサンをさせたところ、ヴィーナスをブルドッグのように描くものが少なくなかったと、創造に最も大切な、『物を全体として正しく観る能力』、『均衡と調和の感覚』が欠けてしまっていると嘆いています。こうした能力と感覚は創造の基本理念に係わるものです。目の前の安易な情報に騙されてはいけません。

平等であっても、対等ではない。あえていえば『同じ醜き仲間』づくりに執着する情けなさを敏感にとらえ、それを民主主義、正義と言わなかったことが継続をなし得た秘薬だったのかと思います。目の前の安易な情報に基づく安易な改革に対しては、熟慮、の目を重ねなければならない。

（長野市 在住）



出 会 い

会務委員：青 木 鐵 夫

さまざまな出会いを重ねながら、私たちは暮らしている。「袖振り合うも他生の縁」を題名に連作したことがあった。たしかに、宿縁としか思えない出会いがある。

オーストラリアの小都市ペンリスでの個展開催も、縁に縁が重なったのことであった。2009年11月から2010年1月にかけてのことである。

遊覧船が行き来するネピアン川のほとり、紫色の花もたわわなジャカラダの並木を抜けると瀟洒な美術館がある。版画38点とドローイング2点は、美しい庭を前にしたギャラリーに気持ちよく展示された。作者として、たいへん嬉しい眺めであった。

人間を描いた墨と和紙による私の木版画は、オーストラリアの人たちに新鮮に映ったようだ。多くの人から共感の言葉もいただいた。

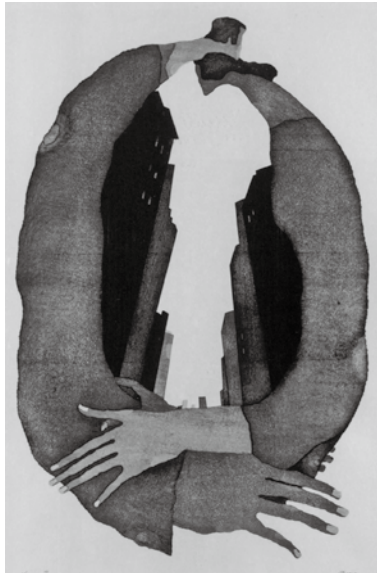
短い滞在を終えての帰りの機中で、己の来し方を振り返ることがあった。

中学時代、平塚運一の大型画集に出会った。木版画をはじめたのはこれがきっかけだから、随分になる。

なぜ木版画を続けているのだろうか。木版画はその技術的な特性から、否応なく簡明な表現になる。結果として、肉筆との違いを木版画は鮮やかに示す。また木独自の風合いもある。私はそこに惹かれてきたのだ。五十年余りやってきて飽きることがない。

人生一番の出会いには木版画であったと、思い至る私であった。

(静岡県藤枝市 在住)



空 84回展 木版 ED10 84×54cm

創作は感動そしてしつこさだ！ ……岡本太郎じゃないけれど

会員：米 倉 泉

便利な時代になった。なんでも数値に置き換えられ合理的に物事が進んで行く。知らないうちにその恩恵を授かりながら生活している。あまりにも早く時は過ぎて行く。手探りをしながら版画制作をしていると、ふと日常に戻った時、この時代の流れへの違和感を持つ。数字で管理された世界にもやもやとした気持ちが残る。表現の世界は常に答えが出ない割り切れない物が相手のような気がする。だから、続けられるのかも知れない。斯く言いながらも今、とても時間のかかる不便な版の腐食作業をしながら、便利なパソコンに向かっていく。限られた時間の使い方が一方向へと無意識に流されることを拒否するかのよう。

コラグラフと銅版画制作を長年やってきた。いずれもデコボコを作りながら版制作をしていると、その平坦な支持体にとどのような影を作っていくかが大切な問題となる。どんなにしっかりした作品のイメージがあってもデコボコ具合を理解しないと無惨な残骸ばかりを作る事になる。むしろイメージは半分位にとどめておかないと版との折り合いをつけながらあとは成り行きまかせにしたほうが良いのかも知れない。そして素材の性質を考えた場合「待つ」ことの大切さを知る。ものもものを融合させながら制作してゆく作業は無理矢理急ぐ事が、いかにその場凌ぎかがわかってくる。ひとつの版として馴染むには、それなりに自然の時間にまかせるしかない。ただ「待つ」だけでは余りに消極的で退屈を伴う。そこで「磨く」。版の中を仕上がった絵のイメージを持ちながら手加減してあちこちと研磨する。この愚直な単純作業が版として無理な凹凸を馴染ませひとつの世界を作ってくれる。

心と形はなかなか融合してくれない。それでも懲りずに制作する。未だに壁にぶつかることは常だが、そこから得られるものは大きい。「創作に大事な事は感動。その想いを強く伝えるためには作品に向かうしつこさです。」子ども時代の恩師の言葉がいつも心の支えとなっている。

(東京都西東京市 在住)



カクシャク ダンディで矍鑠とした 品川工先生の思い出

会員： サイトウ 良

一昨年五月、享年 101 歳、日本最高齢の版画家であり造形作家でもあった先生は、静かな眠りの中で去って逝かれた。

一昨年、4 月開催された国展にも「^{ピン}薺めく」というシルクの商品を出品、健在で、すごいなあと感心していた矢先である。

ところが、ご子息の関野夏樹さんが国展の会場にこられ、このところ好きなアイスクリームも遠慮がち、亦一日 2 杯ちかく飲んでいたお茶も控えめなので心配ですと言っておられた。先生は体調には、とても気を遣われていた。

晩年と言っても 85 歳を過ぎられたころから調子が少しでも悪いと毎週月曜、東京銀座の画廊廻りは休まれることが多く、三ヶ月、半年、一年と足を止められた。そして元気になられるとダンディで矍鑠とした姿勢で笑顔をみせ銀座を闊歩された。とても姿勢が良いので、意識し、ピンとしておられるのですかと尋ねると「子供の頃、姉に^{ホウキ}箒で背中をビシャリ……」とそれから常に意識はしているそうで……。95 歳の頃でもお元気で我々に活力を与えてもらった。

2008 年 2 月「生誕 100 年記念展」が練馬区立美術館で開催された。40 日間毎日会場に通われたそうで驚きである。

ところで僕との出会いは 30 年前、先生は 70 歳、古希を迎えられたころ銀座で三人展を見て、会いたいと言われての対面でした。有名な先生でしたので緊張して会話をした。

そして国画会にさそっていただく。1980 年後半バブル全盛期の頃版画ブームでもあった。先生は国画会版画部の成りゆきが心配で銀座へ出ては版画部へスカウト。現在国画会の版画部で活躍している星野美智子、増田陽一、岡部和彦、園城寺建治、白鳥勲氏他版画部をささえている。

さて先生の制作姿勢は、作品を売るといふことには全然興味はなく「芸術作品作り」一筋。「ネガとポジ」、「反転する」とどう表現出来るかとか、あるいは恩地孝四郎に師事しておられたことからモホリ＝ナギのバウハウスの原書を手に入れ造形の世界へ……。そして紙の造形、金属の造形、モビール作品、更に動く造形にも興味をもたれる。たとえば大型フォークにスプーンをバランスをとり、ハンダ付けをし、人物を連想するも

の等々。

ひたすら版画にしてもオブジェにしても試作、試作、100 歳になっても純粋な作品作りに没頭された。常に前向きで、お洒落で、背筋をピンと、矍鑠とした先生に会えないのは残念至極……。 (合掌)



故 品川 工 先生

〔品川工氏は、2008 年 5 月 31 日老衰のため死去。享年 101 歳〕 新美術新聞 2009.11.21・1201 号に掲載

(茨城県牛久市 在住)

メディア時代に版画を想う

会員： 赤 星 啓 介

『メディア時代に…』とのテーマを頂いてみて、そういえば自分は、広くメディアとの関連で版画を考えた事が余り無かった事に気付きました。若い頃から作品とその時代性、現代性については時間をかけて考えてきました。その結論は、作品の現代性は現代に生きる自身の作品についてくるもので、特に新しさや時代性を追う事はなく、自分はただ作品に向き合って誠実に創ればいい、という所で納得はしたのですが…。

しかし、メディアは現代性などという抽象的なものと違う具体的に作家を取り巻くものです。画家の多くが作品とのみ向き合っている内に状況は大きく変わった様です。メディアといえばテレビとそれ以上にインターネットが主流となり、現実としてそこに乗っているアートはアニメーションやマンガが大勢を占めています。大学で教鞭をとっている先輩方の話でも美術大学に入る学生の多くが、それらの制作を目指していて、例えば版画の生徒が駒井哲郎などの名前も作品も知らないで、先ず芸術・版画に対する興味を目を見開かせる所から始めなければいけない事が多々ある、との事である。

この様に版画、ひいては芸術に対する認知度が、特に若年層にとって、下がっている中で、メディアや社会と関っていく為には、作品から何らかの働きかけや強い個性と作品力を持った作家の登場が望まれます。85 回国展のポスターのコピーを模すならば、「龍三郎がいて、志功がいた」ならず、『我らが目指せ！平成の龍三郎よ、志功よ』と言うべきでしょうか。

(千葉県習志野市 在住)



神戸市立博物館 川西祐三郎展開催

会員：中西茂幸

神戸出身、会員の木版画家・川西祐三郎先生が、70年におよぶ作家活動から生まれた作品を、神戸市立博物館に寄贈されたのを受けて、同博物館は、2010年10月9日—11月23日まで、『川西祐三郎展～版の軌跡～』を開催、華麗な外国風景、モダンな神戸風景、幻想的な日本風景など代表作154点が一堂に展示されました。

又、先の12回関西国展版画グループ展にて、川西祐三郎先生の「米寿」を、先生にはお知らせしない中、サプライズでお祝いをさせていただきました。先生はニコニコと笑って受けて下さいました。おめでとうございます、先生！

昨年度、関西では、これまで遠方と決め込んでいた鳥取県より、国展、関西国展への初出品があり、大変喜んでおるところです。これ迄も、グループ展等の開



川西先生米寿お祝いの会（川西祐三郎先生：前列左から三人目）

催を通して社会にアピールもしてきているのですが、これを機会に我々も座して出品者を待つだけでなく、より積極的に仲間を増やして行ければと考えております。（大阪府高槻市 在住）

創作版画の静岡、次世代発掘に動き

会員：長谷川 安信

静岡は戦前から創作版画の盛んな地域で、昭和24年に県版画協会が設立されています。昨年の75回展では、若い年齢層に版画への関心を高めたいという願いから、新しい試みとして高校生の部が設けられ、又、静岡市の駿府博物館では、県在住の版画作家に焦点を

当て、作品を通して現況と作家の仕事を紹介する目的で有望作家を招待して「県版画招待展21世紀展」を開催した。国展版画部から、昨年と今年とで7名の作家が招待されました。

国展出品の静岡県の作家によって毎年開催している「国展静岡版画展」、昨年は版画部だけでなく、国展5部門合同展として「国展静岡2010展」を、県立美術館県民ギャラリーで9月に開催。版画部門では、会員、準会員、会友、一般合わせて20名が出品。

（静岡県磐田市 在住）

ひとすじの道

会員：小原喜夫

1928年に平塚運一先生は版画講習の為に、愛知県知多半島の亀崎小学校へ出向いた。ここには半田高女の岩田覚太郎という熱心な絵の先生がいて以後6回の講習を行い、知多半島は版画教育の中心地といわれたという。私が28歳の時、この岩田先生から平塚先生直伝の木版画を習うことになるのである。先生から畦地梅太郎、前川千帆、武井武雄氏らの作品をみせて頂き木版画の美しさを知り、版画制作へひとすじの道が開けたように思いました。

それから22年の月日が流れ、70回記念国展懇親会会場の上野精養軒に、百歳の平塚先生が車椅子をサイトウ良氏に押されて現れたのでした。すでに歴史上の人になりつつあった氏の登場に私は大変驚きました。国画会の永年表彰を受けられるという。真っ赤なロシアの民族衣装の平塚先生は泰然として、まるで彫刻のようでした。式が終わり車椅子の先生を壇上から降ろす時、手伝った私の手が偶然平塚先生の腕に軽く触れてしまいました。一瞬、百年のパワーがビビッと伝わってきたような感じがしました。退場の時、千人近い人波で騒然とした会場が静まり、人々が空間をあけて巾1.5メートルくらいのひとすじの道が出来上がりました。それはあたかも、突如海が海底に一本の道が出現したモーゼの「十戒」の映画のワンシーンのようでもありました。その中を赤い平塚運一先生は悠然として帰ってゆかれたのでした。

（三重県四日市市 在住）



異邦人 1976 小原喜夫



若手輩出の北海道版画界

会員：内藤克人

北海道では、20代から30代前半の若手が着々と育っている。札幌の隣、北広島にある道都大学では、版画を志す学生が多く、卒業後も活発に制作に取り組む若者も多い。札幌大谷大学からは銅版画の作家が育っている。ここ数年、国展に連続入選している高野理栄子もその一人である。84回国展で奨励賞を受賞した石井誠（シルク）は紙版画とシルクを融合した独自の技法を開発し、地元「道展」でも新人賞を受賞するなど



道都大学版画工房にて

活躍が目覚ましい。国展準会員の神田真俊（シルク）は荒削りなマチエールが特徴的。今後の展開が楽しみな作家である。

国展以外の有力作家として、幾つかの国際版画展で大賞を受賞した関谷修平（シルク）を挙げておく。細い線のモアレ現象を作品化したミニマルな空間は独特の空気感が漂う。木版では、東京から帰郷した山口星子、道東・帯広が拠点で、大型画面で緻密な仕事を競う後藤由美子、奥秋広美達にも期待が集まっている。

若手が次々にデビューしてくる状況は喜ばしいが、制作を持続してゆくことは大変である。将来を嘱望されながら、仕事や結婚、出産などで制作が困難になり、消えてゆく作家達も多い。地元唯一の作家集団「北海道版画協会」には若手を育ててゆくための様々な施策や支援が求められている。（北海道北広島市在住）



仲間の輪を広げる

会員：吉田志麻

日本は高齢化社会へと大きく変化し、その新しい在りようが求められています。高齢者とは一体、何歳からの事を云うのかと思うことがあります。多忙な現役時代を終え、さあ！これからが自分の時間だ！と感ずる人も多いのです。地域性もありましようが、佐渡、新潟地区では中高年の元気パワーがすさまじい勢いです。地域サークル、カルチャースクールなどが一役かっているのです。人生経験豊富な中高年にこそ、美術、なかんづく、木の力をかりた版画作りの人口を増やし、作品制作に魅力を持たせ、和の中に美術を楽しんで、又、一作、一作が日記になればスバラシイと思います。

私達先輩も、簡単な小作品から興味を持ってもらい、自分達の作品展を開き、大作に手をかけさせるのも使命だと思っています。仲間は待っているだけでは集まらない。ひとり一人が仲間を見つけ、継続は力なりと支え合ってゆく。何年かの間に驚く程個性的、魅力的な表現を見せる方も現れて来るのです。

アメリカの国民的画家『モーゼスおばあさん』*の例を待つまでも無く、何歳からでも人の可能性は開かれているのです。日本の将来に『人間バンザイ』の時代を切り開いてゆくために！！（新潟市在住）

*アンナ・メアリー・モーゼス：晩年に絵を描き始めたモーゼスおばあさんは、ルーブル美術館にアメリカ人画家で初めて絵を買いあげられました。

松江版画会展2010

■会期／平成22年9月22日水～27日月
AM10:00～PM6:00
■会場／島根県立美術館 ギャラリーI



秘曲 武上秋津

貫いたひと―追悼 栗山茂先生

会務委員：青木 鐵 夫

栗山茂先生の生涯は、版画への初心を貫いた98年であったと言えるでしょう。

昭和4年、17歳の先生は仲間と版画グループ「童土社（どうどしゃ）」を結成します。昭和6年には版画雑誌「ゆうかり」を創刊。「ゆうかり」第14号のあとがきは、先生の昂揚した気持ちを伝えています。「版画が珍しい時代は過ぎてゐるのだ。吾々は吾々の経験一切を整理して次の新しい飛躍をなさねばならない」

この青年栗山茂の情熱は、その後の先生を方向づけました。恩地孝四郎や平塚運一との交流から、版画の独自性を先生は早くから理解し追求します。恩地も評価した、先生工夫の紐版画はその現れです。この道程が「栗山茂の紙版画」が生み出したのです。先生の手は、紙を独自の表現媒体に変貌させます。ひとびとの営みへの共感を詠う美しくふくよかな紙版画、それが栗山茂の世界です。先生が発表される作品の一つ一つは、私たちの怠慢を優しく鋭く見透かしているようでした。

思えば、昭和初期の創作版画運動の機運のなかで先生は版画家として出発し、国画会版画部の歩みとともに作品を作り続けました。そんな先生の言葉には、歩んで来た長い年月の重みがありました。

「他へ逃げるのではなく、深めて行くことを考えるべきだ」。先生のこの言葉は、私たちが座右の銘とすべきでしょう。よい仕事で、先生への感謝を示したいと自覚しています。

(静岡県藤枝市 在住)

本橋雅美 masaharu のこと

国展絵画部準会員：本 橋 信 子

(故本橋雅美氏ご令室)

昨年の夏、私は大急ぎで雅美の遺作展を開きました。雅美が自身の手で開きたかった作品展。一日でも早くその願いを叶えてあげたかったのです。本橋は東京都下保谷に生を受け、亡くなる迄の63年間をこの地で過ごしました。少年時代は戦後の復興と共に多くの子供達同様、野球が大好きな少年でした。白いボールを追って見上げた時に目に焼きついたのは、夏雲、広い野原、飛び交う蝶、それぞれが原風景となって、40年後の自身の銅版画に登場するとは、不思議で楽しいことです。そんな野球少年が一生の仕事に絵を描くことを選んだのは、中学3年の時の怪我でした。高校で研究所通いをし、武蔵野美術大学油絵学科在学中に上野の野間伝治先生の工房に通い銅版画を学びました。国画会に出品途中にメゾチントに技法を変え、88年に国画会会員に推挙されました。同時に中学時代の手術時の輸血からのC型肝炎ウイルスキャリアであることが判明、以来21年の長きに渡る闘病が始まりました。手術を含め、闘病を続ける中、作品は彼の手で育ってゆきました。「蝶」が登場し始めた頃のスケッチブックに

「雪の日 胸の中に 蝶が飛んだ

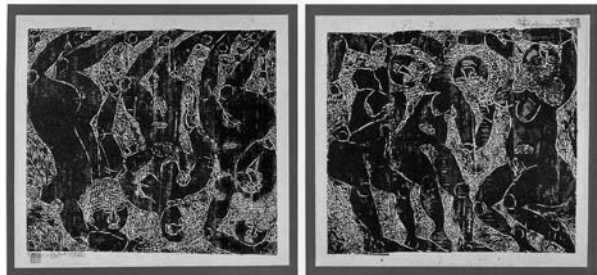
私の中で 確かに 蝶が飛んだ」

という詩が残っています。時にユーモラスな面を見せ乍ら、深遠な世界を丁寧に築き上げた本橋雅美の作品を私は大事に守り続けようと思います。

『国画会版画部の世界で活躍した、そして、している面々...』

日本の美術で世界を驚かしたのは、浮世絵版画である。ゴッガンが茶筒の版画を見て浮世絵版画にビックリ。ゴッホやマネにも印象派の画家達に刺激を与えた。浮世絵は線や面の大小の造形、プラス立体感のある表現に感動したそうである。

歴史は杈（サテ）置き、国画会版画部の先輩達の活躍を振り返ってみたい。代表的な方々を挙げれば、平塚運一の指導の下に、恩地孝四郎は米国で大変な人気で、画集も日本より立派なものが刊行されている。文化勲章受章の棟方志功はサンパウロ国際展で日本人初のグランプリ、この作品は国画会出品作品であった。山口源、文化功労者の齋藤清はリュブリアナ、品川工は英国。又、天野邦弘氏はフレンツェ、黒崎彰氏はポーランド、クラクフ他にて現在活躍中。



棟方志功 湧然とする女者達々 左柵没然の柵、右柵湧然の柵

現役の国展作家としては、金守世士夫会員は米国、サイトウ良会員はストックホルム、増田陽一会員はジュラ（伊）等々で大賞を受賞している。世界で活躍中のCG・いわたきよし会員。星野美智子会員は米国、アルゼンチン。その他工藤忠孝、鈴木修一、堀宗照の各会員は国際展で受賞。青木鐵夫会員、世古剛会員は各々、オーストラリアで個展等開催等々、めざましい活躍である。今後もグローバルな活動を期待したい。

【文責／会員：サイトウ 良】

= 随 想 =

『作品批評について』

会員： 増 田 陽 一

古い話になるけれども、僕が「武蔵野美術」という学校に居た時、週に一回、教授が来て生徒の習作を講評してくれる時間があつた。あるとき、一人の学生の絵をめぐって教授の山口長男と森芳雄の両先生が論争を始めたのである。森先生はその学生の感覚の良さを認めて、「個性を失わずこのまま発展させよ」、と云い、山口先生は、「この絵は基礎が出来ていなくて存在感が無い。素描からやり直せ」、と強硬に言って、両先生とも互いに譲らなかつたと記憶する。当の作者は困惑したに違いない。僕は聞いていて、この程度の作品を前にして二人の大家が真剣に論争するのだなあ、と感動した覚えがある。

別の話だが、或る美術研究所に居たとき、僕も画架を並べていた一人の画学生が居て、彼は石膏デッサンが上手で寺内万次郎先生から「完璧」と賞され、上野の試験にも一度で合格した。林教室に入ったが、林武教授から「君は絵描きになったほうがいいかどうか、もう一度考え直したまえ。」と言われたそうで、その後退学して絵を止めてしまった。彼は人柄も善良で、絵は上手だった筈だけれども、指導者と資質が合わず、またあまりに素直すぎるとこういうことになる。誰のために絵を始めたのか？

以上のような例は、その作家自身の思想が判って興味深い。佐伯祐三が渡仏してヴラマンクに絵を見てもらい「académique!」と一喝されて悟った、と言う伝説は、優れた作家同士の幸運な例であろう。受け取る側の問題である。

僕は高校を出てから、大阪市立美術館の地下にある

研究所で初歩の素描をしたが、敗戦直後の混乱期だったから指導者には当時の関西画壇の重鎮たちが来ていた。その先生方の批評を今も記憶して居る。

赤松鱗作先生は、もう老齢だったが、何時も我々と一緒にモデルを写生していた。掌くらいの大きさのキャンバスの切れ端を持ってこられて、油彩でクロッキーのように描かれていた。学生の絵の批評には、

「もっと一色（ひといろ）に描きなさい。」

「描かないように、描かないように描きなさい。」などと大阪弁で特徴のある表現をされた。禅問答のようだが、絵の調子のことを言っている。「あの先生に『夜汽車』の事を言うと喜ぶぞ。」と先輩が言った。『夜汽車』は昔の美術全集に載っている赤松鱗作の代表作である。

須田国太郎先生は学者風の温厚な風貌であり、石膏デッサンをみて貰うと、「石膏像を石の塊のように明暗だけで見てはいけぬ。例えばこれはヴィーナスであり、ギリシャ神話の美の女神だから、その精神性を表現すべきである。それには細部が重要で、眼の上の目蓋の幅と、眼の下の目蓋の厚みとの違いに注意せよ。」と言う具合だった。優れた作家は初歩の批評にも自己を語る。

小磯良平先生は、僕が裸婦の木炭デッサンに苦労している時、「木炭の明暗で描こうとせず、徹底的に『線を練る』べきだ。線が出来れば、木炭で汚れた布でさっと拭くだけで裸婦の調子は出来る」「裸婦の脚の形は、3箇所位の点を紙の上に見定めておいて、一気に線を引きなさい」と言って、脚の一本を描いてくれた。尤もこれは、彼でなくては出来ない芸当であろう。

作品批評というものは、作者を勇気付け、進歩に有効な講評をしようなどとは、おこがましい事である。作家は自己の限界内で率直に言うが良い。

(千葉県流山市 在住)

BOOK 『メディアと芸術』



三井 秀樹著 集英社新書 ¥720

21世紀、IT革命によって登場したデジタル・メディアは、アナログ映像や印刷等の従来メディアとは、事情を全く異なる。新しいデジタル芸術表現は、全て数値の集合で構成される為、それがオリジナルであるのか、コピーであるのか見分けがつかないし、更に、インターネットによって瞬時に、同時に世界各地からその画像、音声にアクセスできるのである。著者は各種メディア・アートを概観し、芸術の意味、その行方、人間の感性との関係等を論じている。そして、人の心を打つ香り高い芸術作品は、形や色・材料や映像にも精通した造形力に裏打ちされた五感全体の「感性」の存在が絶対条件だとし、バイハンドによるトレーニング、身体性の重要性を力説している。

【世阿弥】

初めて、九州での国展

第85回国展福岡で開催

準備委員： サイトウ 良

名称—国展福岡展

会期—2011年6月28日(火)～7月3日(日)

会場—福岡市美術館

建築概要：敷地面積 25,866㎡、

建築面積：8,541㎡、延床面積 14,526㎡

九州では西部国展として15年間、絵画部のみで福岡、鹿児島、大分、広島各県で開催されていた。絵画部だけなので美術館、新聞社、一般の方々にもほとんど知られていない。ところが、日展、二科、独立、モダンアート、行動、新象他は毎年開かれ、春陽会は北九州で開催。絵画部だけの場合、グループ展という意識でしか見られなかったのでは…、今回福岡で、国展が開催されることにより、その大きさが見えるのではないかと思います。

福岡の絵画部、弥富節子会員他大分、鹿児島、広島各県の会員、準会員の各委員の皆様の努力で西日本新聞社の共催、亦NHK福岡も大変協力をしてくれる所で期待をしているところです。特に版画部は木版といえば現代日本版画家の代表作家ばかりで、故平塚運一、棟方志功、山口 源、笹島喜平、斎藤 清、品川 工、関野準一郎他の先生方々。日本近代版画に貢献された。歴史ある国画会版画部の発展に繋がればいいと願っているところです。(茨城県牛久市 在住)



福岡市美術館 入口

第85回国展 東京・六本木 国立新美術館 絵画・版画・彫刻・工芸・写真

2011年4月27日(水)～2011年5月9日(日) (会期中休館日なし)

名古屋展 = 5月24日(火)～5月29日(日) 愛知県美術館ギャラリー

大阪店 = 6月7日(火)～6月12日(日) 大阪市立美術館

福岡展 = 6月28日(火)～7月3日(日) 福岡市美術館

国画会事務所：〒105-0013 東京都港区浜松町2-1-16 北田ビル4階
TEL & FAX：03-3438-1470

編集後記：小誌のゲラ刷りの段階で、東日本大震災が発生致しました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。大震災、津波、原発事故、聞きしに勝る惨状です。日本のありようが変わらざるを得ないでしょう。もう、GNPは世界何位でもいい、地に足のついた穏やかな国土の再生を願わずにはおれません。

国展も100回展に手が届く所まで回を重ねて参りました。記念号では、来し方を振り返り、合わせて将来を見つめながら、会のあり方について「巻頭言」を頂くと共に、現役作家としてご高齢まで活躍され近年亡くなられた平塚運一、品川工各先生等の思い出、長老川西祐三郎先生から全国の新しい作家の方々まで、更に国展作家の海外での活躍や、新たなデジタル・メディア時代への想い、美術の機微について語る作品批評について等々幅広くご寄稿を頂きました。ご執筆、感謝申し上げます。これまでの国展の遺産を礎に、将来に向かって、作家として地に足のついた真摯な活動で手をつなごうではありませんか。今後の日本再生に寄与せんことを願いつつ……。 (世古 剛)

Bulletin HANGA ブルタン ハンガ 第85回国展記念号 2011年4月

発行●国画会版画部 編集●世古 剛

印刷・製本●株式会社スマッシュ

国画会版画部事務所●TEL&FAX：03-3952-1320 〒161-0033 東京都新宿区下落合3-11-21 白鳥勲方